

子どもたちは輪のなかで育つ

少年少女組織を育てる埼玉センター 指導員 高田 満

少年少女組織を育てる埼玉センター（以下…埼玉センター）では、埼玉県内の各地域に子どもが主人公の子ども会・少年団を組織して、小学校1年生～中学校3年生の子どもと、高校生・学生・社会人の指導員で月に1～4回、地域の公園や校庭・公民館の体育室などで集団遊び（鬼ごっこ・缶けり・ドッチボールなど）を行い、遊びを中心とした仲間作り・居場所作りを展開しています。それぞれの子ども会・少年団によって活動の中身やよさは違いますが、親の協力を得て、集団遊び以外の企画遊び（工作・料理・お出掛けなど）をやったりもします。

また、埼玉センターの主催で、夏には埼玉県秩父市へ300人規模で3泊4日のキャンプ、冬には群馬県水上町へ15

0人規模で2泊3日の雪遊びに行きます。秋には運動会を企画したり、子どもを守る連絡協議会と連携して、「若草つみハイキング」や「子どもまつり」に参加したり、独自に学習会なども行い、多彩な活動を展開しています。

ちなみに、埼玉県は北部・西部・中東部の3地域に分かれていて、その地域の中に子ども会・少年団があります。さいたま市は中東部に属し、中東部では15の子ども会・少年団が活動しています。

遊びを通して「自治」を

僕が埼玉センターに関わり始めて8年ぐらい経ちますが、現在の子どもたちを取り巻く状況は悪くなる一方で、

・子どもが遊ぶ時間がない
・子どもが遊ぶ場所がない
・子どもが遊ぶ文化がない
という実感が強くなっているのが現状です。

僕たちの活動は遊び（集団遊び）を通して、みんなで遊ぶことの楽しさを感じたり、みんなで遊ぶ中でルールを作ったり守ったり、それをみんなの要求に沿って変えていくちからをつけて行くことを目的としています。この「自治」のちからは子どもに限らず、学生や青年など、これからの時代を担う世代にも求められているちからだと思いますが、それが実践しにくくなっている現状は非常に残念です。

学校や塾では、
子ども ↔ 先生 同学年 ↔ 同学年
家庭では、
子ども ↔ 親

の一方の関係しかなく、逃げ場がありません。行動に対する反応もすぐ返って来てしまうのでとても窮屈です。いまの社会は、ひとりひとりのつながりを切り、個人を孤立させる動きが強くなっている気がします。その反面、子ども会・少年

団は3つの輪の中で子どもたちを捉えています。

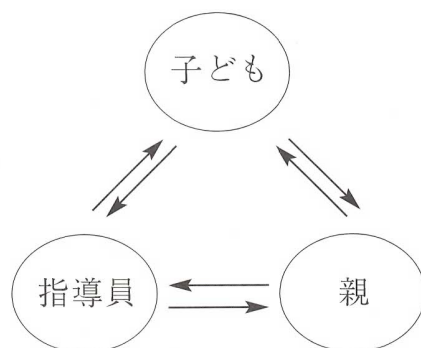
少し前を生きる 未熟な若者の存在

1つ目は、「子ども会・少年団の在り方の輪」です。

子ども会・少年団の大きな魅力は、「指導員」という肩書の、高校生・社会人の若者が関わっていることです。子どもにとって指導員は、一緒に遊んでくれたり、話を聞いてくれる、色々なアイデアを持っていて、そばにいたとなんとか楽しいことが起こりそうな、そんな存在です。親とは違う、少し前を生きる未熟な若者の存在はとても魅力的です。指導員も「指導しよう」という視点で関わるといふより、最低限の安全は確保しながら「子どもと一緒に遊ぼう、楽しいことをやろう」「子どもから教わる、学ぶことって多いな、こちらが成長させられるな」と感じている指導員がほとんどです。

親にとっても、親の知らない子どもの表情を、子ども会・少年団の活動の中で目にするにはよくあります。指導員たちから子どもの成長の話を聞いたり、子

どもを評価されることによって、親も子どもに対する見方が増えます。また、親たちが、まだまだ未熟な指導員たちを信頼し「何かあったら責任をとるよ」という構えていてくれることで、指導員も子どもたちと思い切り遊べますし、面白いことを次々と実現することができると思っています。そうやって指導員たちも、親たちのかかわりの中で大人から見守られ、成長し、大人に憧れる機会を持つことができます。



憧れと思いやりの関係

2つ目は、「子ども集団の在り方の輪」

です。

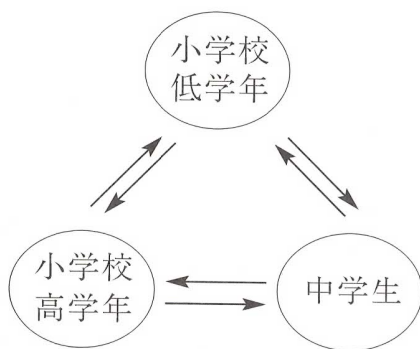
異年齢集団ともいえるこの輪の中には、「憧れと思いやり」の関係が存在します。指導員より自分に近い存在のお兄さんやお姉さんはとても魅力的で、1・2年後に「こうなりたいなあ」と思わせしてくれる目標が近くにあることはとてもいいことだと思います。また、小学生から見る中学生は特別な存在で、時には痛い目にあったり、悔しい思いをすることもあるけれども、かまってほしくて、そばにくっついて遊んでいます。

また、最初は自分たちだけ楽しければよかった子が、小さい子の意見を聞いて遊びやルールを考えたり、一緒に手をとって遊んでくれるようになります。

兄弟では、一番年上だけど、ここにくれば思いっきり甘えられる。姉妹では、一番年下だけど、ここではお姉さんになって小さい子の面倒をみる。そんな、普段の生活では見られない解放された姿を見せてくれます。

センターが主催するキャンプや雪遊びでは、子どものリーダーが育っていきます。子ども会・少年団でリーダーとしてのちからをつけた子どもたちが、「学校でも体育祭をきっかけにクラスをまとめ

た」といった話や、「子ども会・少年団でやっている集団遊びをクラスでも取り入れてみんなで遊んだ」という話を聞くと、子どもたちが子ども会・少年団にとどまらず、さまざまな場所でもちからを発揮していることをとてもうれしく思います。



意図的に集団をつくる

3つ目は、「子どもが育つ社会の在り方の輪」です。

これまで2つの輪は子ども会・少年団の在り方、いいところだけを書いてきましたが、子ども会・少年団だけでは子ど

もは育ちませんし、地域社会は成り立ちません。本来、子ども会・少年団のような子ども集団は、『ドラえもん』の世界のように、自然発生的にあつたものです。しかし、いつからか、子どもたちひとりひとりが切り離されて、集団で遊べなくなり、本当に多忙です。それでも、遊びを通して子どもの仲間作り・居場所づくりをする必要性を感じる大人がいて、協力できる若者がいて、そこを求めてくる子どもたちがいて、意図的に集団を作ることで、なんとか組織できているのが現状です。子どもを取り巻く状況は厳しく、どこから手をつけていいかわからないのですが、子ども会・少年団でできること・・・のびのび遊んで、ひとりひとりと手をつなぐこと、愉快的仲間作りと楽しい活動を展開することで、少しでも豊かな子ども時代を保障していきたいと思えます。

家庭ではしっかりとご飯を食べて、学校ではしっかりと学ぶ。そして思いっきり友達と遊ぶこと。地域社会にこの輪がしっかりと存在することによって子どもは子どもらしく育つのだと思います。いまこそ、この3つの輪が子どもに求めら

れているといえるでしょう。

